

運動と社会

——『波うつ土地』の場所から眺めあげた現在——

安立 清史

現在の運動をとりまく状況のなかには、従来の運動理論の視角には取り込まれてこなかったような複雑に屈折した事態が積み込まれている。環境問題ひとつをとってみても、もはや、開発か環境保護か、というような自明な対立の場所で争われているものばかりではない。現在の社会状況にたいする危機感や問題意識は共有しながらも、運動にはならない、なりえない、そういった立場が現れてきている。本稿が可視化することを試みるのは、そうした人々を運動から分岐させていくものは何か、という「問題」である。その分岐を象徴的にあらわした作品として富岡多恵子の『波うつ土地』を取り上げ、社会的に解説することを試みる。そこに現れてくる問題は、まさしく運動論の新しい社会的課題そのものである。

1

富岡多恵子に『波うつ土地』という、いみ深い作品がある。

東京の郊外、大規模な宅地造成の果てにつくりあげられた新興住宅地に住まう一女性の物語りとして読まれるそれは、現代の都市に生きる（つまりは現在に生きる）ということが強いる或る痛切な矛盾と崩壊の感覚の尖端部に触れている。これは一つの小説であるが、あたかも社会調査から得られるデータ以上に、われわれが生きている現在のリアリティに触れている、そういうたしかな感触を与える。この作品に現われる問題の質は、決して社会学と無縁なものではなく、むしろ、従来の理論以上に、現在の運動や社会状況の解説にたいして重要な示唆を与えてくれる。それは、この作品が「これまで書かれてきた、あの、『もう自然でないもの』を畏れ、怯える小説群の達成の後に現われた、『もう自然でないもの』に自らもう自然でなくなって、会いに行く、新しい姿勢」（加藤〔1985〕）を示したものであることによ

る。それはどういうことか。まずここから出発することにしよう。この作品に現われた「問題」とは、いったいいかなるかたちをしているのか。それは、疑いなくその場所に存在すると考えられ、そのようにいくたびも言及され、立てたり壊されたりしてきた従来の運動社会学の「問題」の場所から、ずいぶんと遠くへ行ってしまったのではないか。

2

この作品の主人公は、高度成長時代が切り拓いた東京郊外の新興住宅地に住んでいる。いまその近くにまた大規模な住宅地の開発が始まっている。その造成現場を見物にゆくとそこでは思いもかけないほどの大地の受難の図がくりひろがれている。地表をはぎとられ、ざくりと大地がその内奥をさらしている姿は、地層が生き物の内蔵のようにもがき波うつ異様な受難の姿である。「三人並んで、土が人工的に段をつくる大ダンチの建設予定地の向うに丘が波うってつづくのを眺めた時、三人

ともそこで別々にひとりになって、しゃがみこんで泣きたいような気がした」。

しゃがみこんで泣きたいようにあふれてくる名づけようのない深い感情を、性急に既成の政治言語にまとめあげ、行動や運動に振りむけようとするところに、もっとも狭く単純ないみでの自然保護派が成立するのであろう—そのようにこの主人公の眼には映る。しかしこのよるべない感情を性急にコトバにまとめあげ、行動に向けて組織化しようとする、空疎で平板でどこかどてつもない欺瞞に繰り込まれていってしまう—そういう行方もまた彼女の眼には明らかだ。生活のためにその波うつ土地を求めて移り住んで来たのはほかならぬ自分たちではなかったか。彼女にはそのことが見えている。

「地域エゴっていうより、先住者エゴっていった方がいいのかしらね」。

彼女にとって、自分たちが自然で、ダンチ造成が反自然である、という単純な二分法はもう信じられるものではない。波打つ土地を見るとき襲ってくる感情は、もう自然ではなくなった、崩壊した自然としての自らの存在の赤裸々な姿を同時にそこに見るからである。できることなら直視したくなかった自分たちの存在の非自然性、反自然性がそこには剥き出しに露呈され吹き出している。多数の人たちが懸命に住み着く場所を求めてここに来た、その当人が、いまここで自分たちの生存の根拠たる大地の崩壊の現場そのものを見つめている。この受難劇の背景に自分たちの存在が深く関与している。自らがここにある、ということのいみづけをコトバで覆おうとしても、それは欺瞞にすりかわっていってしまう。そう突き刺さるようになってしまう。そうわかってしまうことをごまかさずに直視しようとするれば明らかなのは、崩壊する自然を見つめる自分たちも、もはや自然ではありえない、という直截な事実である。ひと

たび見えてしまえば、もうそのことをごまかすことはできない。自然の受難と崩壊の姿を畏怖の念で受け止めるのは、それが自身内部の自然の崩壊そのものの顕れであるからだ。しかし、この現実をどうできよう。

「いちばん考えたいこと、いちばん考えなくてはならぬことが、コトバの役立たぬ世界にあるような、そんな頼りない気持」が襲ってくる。しかし「コトバではなんにもあらわれてこないのだ」。「三人ともがそこで別々にひとりになって、しゃがみこんで泣きたいような気がしたのに、テレかくしになにかそれぞれにコトバを出したのではなかったか」。「少なくともわたしは、なんにもいうことがなかったのだ」。

なにか言うべきなのだろうか、なにか言うことができるのだろうか。ことばにするそばから空転していってしまうのではないか。

*

この作品では、主人公の女性のまわりには、無農薬野菜を流通させる主婦のネットワークが濃密に作られてきている。子供たちが手から離れていた主婦のたいていは、あれこれ稽古事をしているのだが、それらは長続きしない。しかし「野菜の会」の会員になると、その活動に生き甲斐を見出して熱心になる人々が出てくる。「それは容子が『野菜の会』の野菜を信じているからであった。無農薬でつくられた野菜が彼女の御神体であるらしかった」。「『野菜の会』の会員になると、その活動に『生き甲斐』を覚えて（中略）熱心になるひとがいるのだそうである。『だってなんといってもイノチにかかわるから』と容子がいった」。

しかし主人公の女性にはこう見えてしまう。

「熱心な布教師のアヤコさんや容子は、自分にも家族にも他人にも人類にも役に立つことをしているから打ち込めるのである。役に立つという『生き甲斐』も、野菜といっしょに会員に配って

いるのである。『ただ、たんに生きている』と思うのがいやだからである。わたしは、『ただ、たんに生きている』と思っている。できることなら、もっともっと、『ただ、たんに生きている』状態になりたいと思っている。」

こうした行間にたんなるシニズムを読むべきではない。シニカルな視線に武装されてはいるが、おそらくここではシニズム以上の何か決定的に深い崩壊が覗きこまれているのだ。その崩壊があまりにも深いために「野菜の会」のような単純な信仰によっては絶対に救われない、そう痛いまでに見通せてしまう。だが彼女は救済を求めているのだろうか。むしろその自分の救われようのない深い崩壊を徹底的に直視しようとする姿勢だけがここにはある。そこにこの作品が現在のもっとも深い「問題」に触れる、その感触がある。

「丘があり、谷戸があり、池があり、湧水があり、それらがたんに、そこにあって、地形はくり返されて、はるか向うにつづいていた。土地の波は、荒れた海の波のようにシブキはあげなかった。土地の波は、ゆるやかにおだやかに見えるのだった。おだやかな波の上に、ヒトは立ち、ヒトはかがまりして、何千年、何万年か前から漂ってきた。なんにもいうことはないのだ。」

眼の前にくりひろげられている現実にたいして誠実であろうとすればするほどに、押し黙らざるをえなくなってしまう、という痛むような感覚。

ぎりぎりしぼり出せる感想は「ただ、たんに生きている」。「できることなら、もっともっと、『たんに生きている』状態になりたいと思っている」。

これはたんなるシニズム以上の何かである。自分がいま生きていること、それは、これ以上遡りようのない事実である。その端的な事実が、「自然」の広範な崩壊と地続きとなる。そのことに震

憾される、深い畏れをいなく、しゃがみこんで泣きたくなる。しかし、それ以上どうしようがあるうか。富岡の物語りはここで果てる。

眼前で進んでいる事態、それは、外界の自然の崩壊であると同時に、内部の自然の崩壊でもあり、そのふたつの事態は平行し重畳して進んでいる。富岡の作品では、この二重の崩壊と受苦のさまが、ごまかされることなく直視されている。そして、それ以上の解は示されない。加藤典洋は、それを「これまでにはない、一つのモラルを示しているだろう」と解している。

問題の核とその在処は、すでに申し分なく提出されているが、その問題のかたちは単純ではない、ありえない。

3

富岡作品は、いわば無垢なる「自然」への信頼を棄却することにおいて、現在という地平に確かに到達している。⁽¹⁾

彼女は自身の存在の「自然」（正当）性も、そこから生ずるはずの行動の「自然」（自発）性も、どちらも信じていない、信じられない。信じているのは、ただ自分の眼がおこなう直視だけだ。退路は断たれている。

ただここにおいては、現在が強いる問題や矛盾を直視すること、まさにそのことが彼女から生きるうえでの能動性を減殺していくのをどうしようもない。直視や認識と引き替えに、言葉が、行動が剥落していく、それはどういうことなのか。

彼女の立っている場所からは、無垢な「自然」を根拠に矛盾や問題に立ち向かう、というプログラムは出てこない、出てくることが禁じられている。

しかしこの認識は、或る正しさを含んでいるので、彼女が「自然」性への信頼を棄却する、その

彼女もまた「現在」を肯定し、そこに安住しているわけではないからだ。そうではなかったか。彼女の意識を圧倒的に覆っているもの、それは「波うつ土地」の影にほかならない。

彼女もまた、広汎な崩壊感覚や危機感に至るところで瀕している現代人の一人である。しかもこの「現在」を受け止め、その責任を自分なりに引き受けようとすらしている。しかしそれはもはや素直に行動や運動とはならない。その奇妙な屈折と齟齬こそが、富岡作品を奥深いものにしている。しかし結果的に、彼女から出てきたものは、「自然」を信じる運動にたいする押さえ難い攻撃性と、直視する（だけ）というモラル、そして寒々とした「現在」の風景である。

7

ここまでくると、富岡作品の「運動」認識の裏側を、富岡作品に依らず、別の角度から探査する必要がどうしても出てくる。富岡作品だけでは、現在の運動の理解には、いかにも不十分であり、欠落が多く生じてきてしまう。

しかしそこについては別稿を期し、ここでは、「運動」の側は、富岡作品のような実感が社会にじんわり波及しているとしたら、それをいったいどう受け止めているのだろうか、という問題について予備的な考察を行っておきたいのである。わたしの考えでは、富岡作品における「運動」への攻撃性に満ちた誤解と、「運動」側による、富岡作品に見られるような現実感覚への無理解とが、ちょうど表裏一体を成して、現在の運動をとりまく社会状況となっているように思われるからである。

*

「運動」の側は、この富岡作品のような現実（現在）感覚をいったいどのように受け止めてい

るだろうか。「運動」の声は富岡作品へと届いていなかったが、逆に「運動」には富岡作品のような声が聴こえているだろうか。そのような問いもまた、重要であると思われる。

富岡作品におけるような視線や認識とまったく無縁に、運動者の間（だけ）で流通するリアリティを以て、運動を展開してゆくこともおそらくできるだろう。⁽⁷⁾

だがここ数年、各地の市民運動・住民運動の聴き取り調査に参加してきて感じられたことは、彼ら自身、眼前で生起している「問題」の重みやその受難・受苦を社会にたいして訴えるという運動行為の正当性を信じながらも、そのリアリティの波及が運動者の限られた狭い領域以上に広がっていかない、という或る閉塞し孤立した感覚を抱いていることであった（→花崎〔1985〕他参照）。そのいみで富岡作品に現われた、運動にたいする攻撃性あふれるシニカルな立場は、運動や運動論に、ある課題を突きつけているように思われる。

それは運動も運動理論も、富岡作品に象徴されるような困難な場所に立って現在を生きている、そうした人々の現実感覚にたいして有効に応答することなくしては、運動外の人々の心にひろく届くことができない、ということである。富岡作品の発するメッセージを無視する立場を選ぶことから、人々の感じる「現在」の核心をはずしてゆく道しか辿りようがない。富岡作品のような感覚を共有している人々にとって運動は、現在が強いほんとうの課題に的中せず、どこか空転していつてしまう、そのようなものとしてリアリティを失っていつてしまう。そう感じられるようになっているのではないか。

富岡作品から結果的に現れてきてしまうもの、その限界性については既に述べてきたとうりだが、「運動」がこのままであったらどうになってしまうのか、それについても同様に分析しておく必要

運動と社会

——『波うつ土地』の場所から眺めあげた現在——

安立 清史

現在の運動をとりまく状況のなかには、従来の運動理論の視角には取り込まれてこなかったような複雑に屈折した事態が積み込まれている。環境問題ひとつをとってみても、もはや、開発か環境保護か、というような自明な対立の場所で争われているものばかりではない。現在の社会状況にたいする危機感や問題意識は共有しながらも、運動にはならない、なりえない、そういった立場が現れてきている。本稿が可視化することを試みるのは、そうした人々を運動から分岐させていくものは何か、という「問題」である。その分岐を象徴的にあらわした作品として富岡多恵子の『波うつ土地』を取り上げ、社会的に解釈することを試みる。そこに現れてくる問題は、まさしく運動論の新しい社会的課題そのものである。

1

富岡多恵子に『波うつ土地』という、いみ深い作品がある。

東京の郊外、大規模な宅地造成の果てにつくりあげられた新興住宅地に住まう一女性の物語りとして読まれるそれは、現代の都市に生きる（つまりは現在に生きる）ということが強い或る痛切な矛盾と崩壊の感覚の尖端部に触れている。これは一つの小説であるが、あたかも社会調査から得られるデータ以上に、われわれが生きている現在のリアリティに触れている、そういうたしかな感触を与える。この作品に現われる問題の質は、決して社会学と無縁なものではなく、むしろ、従来の理論以上に、現在の運動や社会状況の解釈にたいして重要な示唆を与えてくれる。それは、この作品が「これまで書かれてきた、あの、『もう自然でないもの』を畏れ、怯える小説群の達成の後に現われた、『もう自然でないもの』に自らもう自然でなくなって、会いに行く、新しい姿勢」（加藤〔1985〕）を示したものであることによ

る。それはどういうことか。まずここから出発することにしよう。この作品に現われた「問題」とは、いったいいかなるかたちをしているのか。それは、疑いなくその場所に存在すると考えられ、そのようにいくたびも言及され、立てたり壊されたりしてきた従来の運動社会学の「問題」の場所から、ずいぶんと遠くへ行ってしまったのではないか。

2

この作品の主人公は、高度成長時代が切り拓いた東京郊外の新興住宅地に住んでいる。いまその近くにまた大規模な住宅地の開発が始まっている。その造成現場を見物にゆくとそこでは思いもかけないほどの大地の受難の図がくりひろがれている。地表をはぎとられ、ざくりと大地がその内奥をさらしている姿は、地層が生き物の内蔵のようにもがき波うつ異様な受難の姿である。「三人並んで、土が人工的に段をつくる大ダンチの建設予定地の向うに丘が波うってつづくのを眺めた時、三人

ともそこで別々にひとりになって、しゃがみこんで泣きたいような気がした」。

しゃがみこんで泣きたいようにあふれてくる名づけようのない深い感情を、性急に既成の政治言語にまとめあげ、行動や運動に振りむけようとするところに、もっとも狭く単純ないみでの自然保護派が成立するのであろう—そのようにこの主人公の眼には映る。しかしこのよるべない感情を性急にコトバにまとめあげ、行動に向けて組織化しようとする、空疎で平板でどこかとてつもない欺瞞に繰り込まれていってしまう—そういう行方もまた彼女の眼には明らかなだ。生活のためにその波うつ土地を求めて移り住んで来たのはほかならぬ自分たちではなかったか。彼女にはそのことが見えている。

「地域エゴっていうより、先住者エゴっていう方がいいのかしらね」。

彼女にとって、自分たちが自然で、ダンチ造成が反自然である、という単純な二分法はもう信じられるものではない。波打つ土地を見るとき襲ってくる感情は、もう自然ではなくなった、崩壊した自然としての自らの存在の赤裸々な姿を同時にそこに見るからである。できることなら直視したくなかった自分たちの存在の非自然性、反自然性がそこには剥き出しに露呈され吹き出している。多数の人たちが懸命に住み着く場所を求めてここに来た、その当人が、いまここで自分たちの生存の根拠たる大地の崩壊の現場そのものを見つめている。この受難劇の背景に自分たちの存在が深く関与している。自らがここにある、ということのいみづけをコトバで覆おうとしても、それは欺瞞にすりかわっていってしまう。そう突き刺さるやうにわかってしまう。そうわかってしまうことをごまかさずに直視しようとするれば明らかなのは、崩壊する自然を見つめる自分たちも、もはや自然ではありえない、という直截な事実である。ひと

たび見えてしまえば、もうそのことをごまかすことはできない。自然の受難と崩壊の姿を畏怖の念で受け止めるのは、それが自身内部の自然の崩壊そのものの顕れであるからだ。しかし、この現実をどうできよう。

「いちばん考えたいこと、いちばん考えなくてはならぬことが、コトバの役立たぬ世界にあるような、そんな頼りない気持」が襲ってくる。しかし「コトバではなんにもあらわれてこないのだ」。「三人ともがそこで別々にひとりになって、しゃがみこんで泣きたいような気がしたのに、テレかくしになにかそれぞれにコトバを出したのではなかったか」。「少なくともわたしは、なんにもいうことがなかったのだ」。

なにか言うべきなのだろうか、なにか言うことができるのだろうか。ことばにするそばから空転していってしまうのではないか。

*

この作品では、主人公の女性のまわりには、無農薬野菜を流通させる主婦のネットワークが濃密に作られてきている。子供たちが手から離れていった主婦のたいていは、あれこれ稽古事をしているのだが、それらは長続きしない。しかし「野菜の会」の会員になると、その活動に生き甲斐を見出して熱心になる人々が出てくる。「それは容子が『野菜の会』の野菜を信じているからであった。無農薬でつくられた野菜が彼女の御神体であるらしかった」。「『野菜の会』の会員になると、その活動に『生き甲斐』を覚えて（中略）熱心になるひとがいるのだそうである。『だってなんといってもイノチにかかわるから』と容子がいった」。

しかし主人公の女性にはこう見えてしまう。

「熱心な布教師のアヤコさんや容子は、自分にも家族にも他人にも人類にも役に立つことをしているから打ち込めるのである。役に立つという『生き甲斐』も、野菜といっしょに会員に配って

いるのである。『ただ、たんに生きている』と思うのがいやだからである。わたしは、『ただ、たんに生きている』と思っている。できることなら、もっともっと、『ただ、たんに生きている』状態になりたいと思っている。」

こうした行間にたんなるシニズムを読むべきではない。シニカルな視線に武装されてはいるが、おそらくここではシニズム以上の何か決定的に深い崩壊が覗きこまれているのだ。その崩壊があまりにも深いために「野菜の会」のような単純な信仰によっては絶対に救われぬ、そう痛いまでに見通せてしまう。だが彼女は救済を求めているのだろうか。むしろその自分の救われようのない深い崩壊を徹底的に直視しようとする姿勢だけがここにはある。そこにこの作品が現在のもっとも深い「問題」に触れる、その感触がある。

「丘があり、谷戸があり、池があり、湧水があり、それらがたんに、そこにあって、地形はくり返されて、はるか向うにつづいていた。土地の波は、荒れた海の波のようにシブキはあげなかった。土地の波は、ゆるやかにおだやかに見えるのだった。おだやかな波の上に、ヒトは立ち、ヒトはかがまりして、何千年、何万年か前から漂ってきた。なんにもいうことはないのだ。」

眼の前にくりひろげられている現実にたいして誠実であろうとすればするほどに、押し黙らざるをえなくなってしまう、という痛むような感覚。

ぎりぎりしぼり出せる感想は「ただ、たんに生きている」。「できることなら、もっともっと、『たんに生きている』状態になりたいと思っている」。

これはたんなるシニズム以上の何かである。自分がいま生きていること、それは、これ以上遡りようのない事実である。その端的な事実が、「自然」の広範な崩壊と地続きとなる。そのことに震

憾される、深い畏れをいだく、しゃがみこんで泣きたくなる。しかし、それ以上どうしようがあるうか。富岡の物語りはここで果てる。

眼前で進んでいる事態、それは、外界の自然の崩壊であると同時に、内部の自然の崩壊でもあり、そのふたつの事態は平行し重畳して進んでいる。富岡の作品では、この二重の崩壊と受苦のさまが、ごまかされることなく直視されている。そして、それ以上の解は示されない。加藤典洋は、それを「これまでにはない、一つのモラルを示しているだろう」と解している。

問題の核とその在処は、すでに申し分なく提出されているが、その問題のかたちは単純ではない、ありえない。

3

富岡作品は、いわば無垢なる「自然」への信頼を棄却することにおいて、現在という地平に確かに到達している。⁽¹⁾

彼女は自身の存在の「自然」（正当）性も、そこから生ずるはずの行動の「自然」（自発）性も、どちらも信じていない、信じられない。信じているのは、ただ自分の眼がおこなう直視だけだ。退路は断たれている。

ただここにおいては、現在が強い問題や矛盾を直視すること、まさにそのことが彼女から生きるうえでの能動性を滅殺していくのをどうしようもない。直視や認識と引き替えに、言葉が、行動が剥落していく、それはどういうことなのか。

彼女の立っている場所からは、無垢な「自然」を根拠に矛盾や問題に立ち向かう、というプログラムは出てこない、出てくるのが禁じられている。

しかしこの認識は、或る正しさを含んでいるので、彼女が「自然」性への信頼を棄却する、その

ことだけを性急に批判することはできない。彼女の「行動」からの離脱を一方的に裁断することからは、「問題」をひどく逆もどりさせること以外おそらくなにごとも出てこないのである。だがほんとうの「問題」は、彼女の手前にあるのではなくて、じつは彼女のさらにその先にあるのではないか。

富岡をつまらなく批判し倫理的に裁断しようとするところから、直接行動至上主義から宗教的な根本主義まで、或いは逆に（同じことだが）「運動政治の終焉」というような息せき切った性急な解釈が生まれてきてしまうだろう。しかし「問題」は今やもう、そうした対立の軸上には乗っておらずさらに先へ行ってしまっているのではないか。

*

高木仁三郎は、現在が問われている中心的な問題を「いま自然をどうみるか」というかたちで抽出している。ギリシア神話以来、宇宙的で人間と親和的であった「自然」が「近代」の開始とともに崩れだし変容して、機械や道具、材料や資源としての極小な物存在へと縮小してゆく。そのような流れの涯に現在の公害から「核」問題へと至る道が敷かれた。したがって現在必要なのは、「近代」や産業化社会が強いた自然と人間との関係を根本から問い直し、エコロジックな地球像、民衆のなかに息づく自然を回復して、「自然に生きる」そういう生きかたをもういちど創りなおすことである、と論じている。エコロジストの議論としてもっとも良質な部分を代表する彼の議論の内実は、このような図式では掬いとれない真摯さにあふれていて、或る実存的な共感を呼びさましとする。しかし、この高木の議論は、もうどこか富岡作品と交差しないで通りすぎていってしまう、そういう感触をも与えてしまう。これはどういうことなのか。高木の議論がもっとも突き刺さることを必要としている人々に、それは的中していない、そういう

感触を得てしまうのである。

それはひとつには、高木が想定しているような「近代」を作り、資本制社会へと邁進してきた人たち（典型的には男性）と、富岡作品のような「女性」とが、社会的な役割りや生きる場所を異にしている、その認識やリアリティに断層やずれを必然的に持ってしまうことにもよるだろう。しかしもうひとつ重要に思われるのは、人々は高木の想定するほど現在の「自然」崩壊にたいして盲目、無自覚ではなく、視野の片隅にそれは見えていて、しかし或る諦念とともにそれを噛みしめ、耐えている、そういう理由もあるのではないかということである。富岡作品はまさにそういう場所にあって、高木の声が聞こえながらもすれ違ふ、そういう構造に立っているのではないか。富岡作品のなかには、そう感じさせるものがたしかに存在する。もしそうであるとしたら、高木の問題提起は、そのもっとも届く必要のある人々に届かない、そういう立てられかたをしているのではないか。そこからでは、高木がいくら真摯に声をあげても、その声が届かない、すれ違っていってしまう。⁽²⁾⁽³⁾

問題が形を成しはじめ、そして分岐してゆく場所、それはもっと先にあるのではないか。それが姿をあらわす場所は、「高度成長下、いっせいに『国民』が『向上』をめざして『離陸』して」いったあと、やみくもな開発が怒涛の如くアナーキーに荒れ狂ったそのあと、すなわち土地がその波打つ受難の姿を曝しているその現場に立ち会ったあと、にやってくる。開発や近代化、それにとまなう自然破壊・環境破壊、といったことは端的な事実であって、もやは問題のかたちをなさない。高木はそのことを「自然」観の狭小化というふうにとらえるが、その過程は人々の日々の生活がうみだす事実性の累積と無縁に進行してきたわけではない。だから問題はその後とにやってくる

というべきなのだ。

富岡の作品における主人公の視線に注意すべきだ。彼女の眼には、波打つ土地の惨劇がこれ以上ないほどリアルに映っている。彼女は「見た」。それはたんに目撃したということ以上のなにかである。したがって問題は、この崩壊が見えるか否かなどではない。それは当然見えているのだ。彼女は、彼女の批判する「野菜の会」の人々（高木仁三郎を「野菜の会」のような人々と同値することは出来ないけれども）と、その原風景を共有している。しかし、その後にくるものはこんなにも違ってしまう。⁽⁴⁾

それはどうということなのか。

問題が分岐する場所、それは「自然」破壊が見えるか否か、「環境」を守るか「開発」を優先するか、というような立場の違いが理念の違いに還元できるような明快で単純な場所ではもうない。⁽⁵⁾

彼女もエコロジストも、いわば寄り添うようにして、同じ場所に並びたって、同じ光景を見つめている。しかし、そこから受け取ってくるものはこんなにも違う。そのあとで行動として現れてくるものはこんなにも違ってしまう。

この分岐こそが、本稿が設定したいと考える「問題」である。

4

ところで富岡作品において、自然崩壊を直視する視線は、いったい何を彼女にもたらしたか？そう問うてみることも出来る。彼女の認識、そこから先は作中に書かれた方向へしか開かれていないのであろうか？

富岡作品における直視、彼女の認識から始めて、全く別の方向へと至る回路は封じられているのであろうか。

この先の道は、富岡作品の選びとった道以外にもひらかれているはずだ。そうではないだろうか。彼女の認識がもたらしたもので、それはあんなにも過酷で寒々としたものになってしまったのではないか。そして、そのことに富岡は自覚的だ。

この作品の主人公は、たとえばこういう人生の中にある。「はっきりいってほしかったんでしょね、わたしに。幸福か不幸かをはっきりと。そういう単純な言い方をすればわたしは不幸ではありませんよ。なにを見ても、生きているから見られるのだとよく思いますよ。きれいな空の色を見ると生きているから見られるんだと思いますし、アミコさんのご夫婦とお知り合いになれたのも、生きているからだと思うんです。でも、なんといっても、いちばんいいのは、生まれていなかったことじゃないかと思ってしまうんです。」

これは彼女の認識が正確に必然的に導きだしたものだということではないか。

彼女の直視はあんなにも正確で、あんなにも鋭かったのに、彼女の認識から出てくるものは、こんなにも寒々としている。こんなにも不毛にふちどられ、無に浸食されている。

しかしこのことは、富岡作品とその現在をめぐる認識を共有せず（富岡作品のさし示す認識を認めずに）、「野菜の会」のような行動を起こし運動してゆく方向にのみ社会が救われる出口が見出せる、というような単純な話ではない。或るひとが運動し、或るひとが運動しない、そのあいだにどんな「問題」があるというのか。この作品の主人公のような人々に運動を強要することで「問題」が解決されるはずはない。富岡を否定して「野菜の会」を肯定する、そういうことが社会学的な「問題」設定であるはずはないのだ。

5

しかし富岡作品から出てくるものが、こんなにも荒涼としてきてしまう理由、それが確かにあるはずだと思う。そのひとつは、彼女が運動を「野菜の会」のようなものとしてしか評価できないことに起因するだろう。

彼女にとって「運動」とは、行動によって直視や認識を隠蔽してしまう悪しき装置のようなものとして受け取られる。「いちばん考えたいこと、いちばん考えなくてはならぬことが、コトバの役立たぬ世界にあるような、そんな頼りない気持ちを感じながら喋っているのではないか」。それにもかかわらず言葉は発せられるやいなや人々を拘束しはじめる。「御神体」がつくられ、「布教師」が現われる。いつのまにやら「生き甲斐」まで配りはじめる。

だから「コトバではなんにもあらわれてこないのだ」。

「別々にひとりになって、しゃがみこんで泣きたいような気がした」ときに、「なにかそれぞれにコトバに出し」て「テレかくし」へと逃げこんでいるのではないのだ、という彼女のモラルリティはそこから来る。「ただ、たんに生きている」。「できることなら、もっともっと、『ただ、たんに生きている』状態になりたいと思っている」。

加藤典洋は、これを「これまでにない、一つのモラル」の出現と見ている。従来のモラル、それは「現在何か致命的に崩壊しかかっていることへの直覚と危機感」のうえにたちながら「にもかかわらずその前にとどまることをせず、既知の枠組みに逃避することによってそれを『克服』、『免疫化』しようとする、一種退行的な姿勢」に陥ってしまっていた。そこからたとえば反核運動や「野菜の会」の運動が現われる。しかしこの作品に現われる態度は、現在を襲う、或る名付けようもない危機の前にとどまり、それを既知の名(コトバ)で回収してしまうことをせず、必死に眼を見

開こうとしている点において、これまでの「社会へ」という回路と鋭く対立するモラルを示している、そう解される。

しかし、彼女のこのモラルこそが、或る種の運動にたいする見えかたをいちじろしく制限し、見えてくる可能性を排除してもいる。彼女がこの認識を獲得することと引き替えに彼女の視界から脱落していったものをここで指摘することができる。それはたとえば「社会」性である。政治であり、権力や制度や集合性ゆえに現れてくる何ごとかであり、総じて「自然」の対極に位置する「社会」である。そうではないだろうか。彼女の認識は、どこかすべて個人の実存の中へと解消されてゆく。彼女のモラルはきわめて個人主義的な美学に帰っていく。

だがそもそも「野菜の会」のような運動は、彼女が見たような貧相なものだったのであろうか。彼女のようにいわば「社会」をふりすてることで獲得した認識の場所から見ると、それはいかにも無意味な徒労に見えてくる。だが別の角度から見ると、富岡作品のモラルそのものが貧血してみえてくる。或る閉ざされた場所に幽閉されている、そのように見えてくるのではないか。

ただここで慎重を期さねばならないのは、富岡自身はそのことを知っている、自覚したうえでえて「社会」性を自ら棄却している、そういう屈折を経ていると思われるからである。彼女はだから「政治」を奪われているのではない、「社会への関わり」を抑圧されているのではない。そのことが重要である。彼女の認識を、一種の「疎外」形態として理解してしまうのは誤りであろう。彼女は、むしろ、既知の「政治」や「社会」性を振り捨てることを通して初めて「現在」の中に確かにいる、そういう手応えを得たのである。それゆえに「新しいモラル」のようなものを獲得することができたのである。

いまここで「新しい社会運動」の詳しい解説をすることは出来ない(→安立〔1985〕〔1986〕参照)。運動に内在して、その視角から富岡作品にひそむ「欠落」を論じる、そういう作業はまた別稿を期したいと思う。ここでは、運動の声が何故、富岡作品へと届かないのか、そのことを考えておきたい。

運動の声が富岡作品へと届いてゆかない、そのことが却ってわれわれに、或る同時代的なりアリティに触れているという直感をもたらす。すれちがって届かない、その落差や断層ゆえに却ってリアルに現在が露出していることを感じさせる、そのような作品に『波うつ土地』はなっている。そこにむしろ現在の社会の奇怪な屈折、ともいうべきものがつかみ取られている。そのような感想が湧くのである。

「現在何か致命的に崩壊しかかっていることへの直覚と危機感」は共有しながら、いったい何が、富岡作品と運動とをこんなにも隔ててしまうのだろうか。そこには、或る時代的な刻印が押されているように、思う。現在の孕む「問題」の根深さが顔を覗かせているように見える。両者を分かちものは、たんに人格や性別、生活環境や仕事、住んでいる場所や個人的資質の違いでは、おそらくない。⁽⁶⁾

運動が醸成し放射する問題認識や危機感、それはおそらく富岡にも届いているはずなのだ。だから、富岡と運動とを分かちものは、「直覚と危機感」の有無ではない。

「運動」の声が富岡作品に届いていかないとすれば、それは彼女が現在へと至りつくその道筋が(どのような経緯のうえでか、この作品からは窺えない或る理由によって)、無垢さ、「自然」さ、素朴さ、素人さ、要するに「草の根」大衆性のよ

うなものへの信頼を、彼女に棄却させているからである。彼女にとって、「自然」や「運動」は、そのようなものとして(のみ)理解され、そして棄却されている。作者は、たとえてみれば「運動」を経由して後、それを振り捨てることを通じて、現在の場所へと辿りついた、そのような実感を手にしたうえで、攻撃性を「運動」へと突きつけているのだ。そのことを理解しておく必要がある。作者の意識にとって「運動」はいわば「乗り越えられた」もののようにしか映ることが出来ない。そのようにして、彼女は「運動」への信頼を棄却したのちに「現在」を獲得した、そう確信しているのである。

おそらくこうした「運動」理解が、貧しく表層的であるにもかかわらず、それが要の一点を突いていることもまた、確かなのだ。だからこそ、この作品に或るリアリティが宿り、人々へと訴及する力が現われる。それゆえ作者の「運動」理解の貧しさを理由にして彼女の提起している「問題」を無視して通り過ぎることができないのである。

彼女はまた、すこしも没行動・没社会性のひとではない。この作品をおおっているのは、「自然」の崩壊感覚ばかりではない。「自然」を信じ「自然」を素朴に守ろうとする人々の思想や営みに対するあらわな攻撃性にも満ちあふれている。それはまるで同じフェミニズム陣営のなかで、反エコ・フェミニズム者が、エコ・フェミニズム者にたいして発揮する攻撃性の発露とまったく同型なかたちを示しているように思われる(→落合〔1985〕参照)。

しかしそれは、作者がいつしか夢から醒めて「現実主義者」になっていて、運動者の「理想主義」を嘲っている、そのような単純な構図であることを示しているのではない。そのような手前の場所での感情的な反撥や対立とも異なっている。

彼女もまた「現在」を肯定し、そこに安住しているわけではないからだ。そうではなかったか。彼女の意識を圧倒的に覆っているもの、それは「波うつ土地」の影にほかならない。

彼女もまた、広汎な崩壊感覚や危機感に至るところで瀕している現代人の一人である。しかもこの「現在」を受け止め、その責任を自分なりに引き受けようとすらしている。しかしそれはもはや素直に行動や運動とはならない。その奇妙な屈折と齟齬こそが、富岡作品を奥深いものにしている。しかし結果的に、彼女から出てきたものは、「自然」を信じる運動にたいする押さえ難い攻撃性と、直視する（だけ）というモラル、そして寒々とした「現在」の風景である。

7

ここまでくると、富岡作品の「運動」認識の裏側を、富岡作品に依らず、別の角度から探査する必要がどうしても出てくる。富岡作品だけでは、現在の運動の理解には、いかにも不十分であり、欠落が多く生じてきてしまう。

しかしそこについては別稿を期し、ここでは、「運動」の側は、富岡作品のような実感が社会にじんわり波及しているとしたら、それをいったいどう受け止めているのだろうか、という問題について予備的な考察を行っておきたいのである。わたしの考えでは、富岡作品における「運動」への攻撃性に満ちた誤解と、「運動」側による、富岡作品に見られるような現実感覚への無理解とが、ちょうど表裏一体を成して、現在の運動をとりまく社会状況となっているように思われるからである。

*

「運動」の側は、この富岡作品のような現実（現在）感覚をいったいどのように受け止めてい

るだろうか。「運動」の声は富岡作品へと届いていなかったが、逆に「運動」には富岡作品のような声が聴こえているだろうか。そのような問いもまた、重要であると思われる。

富岡作品におけるような視線や認識とまったく無縁に、運動者の間（だけ）で流通するリアリティを以て、運動を展開してゆくこともおそらくできるだろう。⁽⁷⁾

だがここ数年、各地の市民運動・住民運動の聴き取り調査に参加してきて感じられたことは、彼ら自身、眼前で生起している「問題」の重みやその受難・受苦を社会にたいして訴えるという運動行為の正当性を信じながらも、そのリアリティの波及が運動者の限られた狭い範囲以上に広がっていかない、という或る閉塞し孤立した感覚を抱いていることであった〔→花崎〔1985〕他参照〕。そのいみで富岡作品に現われた、運動にたいする攻撃性あふれるシニカルな立場は、運動や運動論に、ある課題を突きつけているように思われる。

それは運動も運動理論も、富岡作品に象徴されるような困難な場所に立って現在を生きている、そうした人々の現実感覚にたいして有効に応答することなくしては、運動外の人々の心にひろく届くことができない、ということである。富岡作品の発するメッセージを無視する立場を選ぶことからは、人々の感じる「現在」の核心をはずしてゆく道しか辿りようがない。富岡作品のような感覚を共有している人々にとって運動は、現在が強いほんとうの課題に的中せず、どこか空転していつてしまう、そのようなものとしてリアリティを失っていつてしまう。そう感じられるようになっていたのではないか。

富岡作品から結果的に現れてきてしまうもの、その限界性については既に述べてきたとおりだが、「運動」がこのままであったらどうになってしまうのか、それについても同様に分析しておく必要

があるのだ。

8

このように「運動」と富岡作品とは、同じ「直覚や危機感」から発して、ひどく異質な場所に至ってしまったように見える。「運動」と富岡作品とは、同じ原風景から出発したはずなのに、至りついた現在の場所は、もうこんなにも違ってしまっている。

彼女もまた、ひどく傷ついて現在へと辿りついているのであるが、その傷はナイーブな「運動」によっては回復不能なことを示している。彼女の傷は、無垢な「自然」へと帰ってゆくことによって、もう癒されない。そのような若さを、彼女はもう失っている。そういう彼女の姿が、私にはどこかひどく現在という時代と重なりあって見えてきてしまうのである。

富岡作品を「運動」を論じることとはまったく異質で無縁な存在、というふうに切り捨ててしまうことのできない何かを繰り返し感じるのは、彼女が「運動」へと差し向ける攻撃性、敵意にも似たその感情の深さこそが、現在という時代に置かれた「運動」の命運、「運動」をつつむ時代や社会の大きな流れと、確かにつながっているからである。彼女の発散する攻撃性は、現在が「運動」へと差し向ける反撥力と同型である。そのいみで富岡作品の差し出す問題は、すぐれて運動論の現代的な課題のひとつだと言えよう。⁽⁸⁾

結 論

従来、運動論で、主に問題として設定されてきたことの中心は、運動の組織的動態の解明や、運動の歴史的意味や社会的効果の分析、であったと

言えるだろう。

しかし、本稿が「問題」として設定し、それを可視化すべく試みてきたことは、そうした従来の運動論の文脈や位相から、すでに逸脱して展開している事態のことである。

現在において運動をめぐる状況は、もはや、「運動」が表出し、係争化する問題の是非をめぐる争われているばかりではない。そのような対立（たとえば西独の「緑の党」が典型的に問うているような、環境保護か開発か、というような問題は、政治的な問題としてもすでに自明な前提へと繰り込まれつつあり、「問題」の奥深い根はもっと先へと移行しているように思われる。

むしろ現在ほんとうに問題なのは、運動とその状況認識も危機感も共有しながら、けっして「運動」へとは同化、統合されてはいかない（されえない）、そのような分岐が決定的に現れてきているということである。その分岐を象徴的にさし示しているものとして、本稿では『波うつ土地』という作品を、運動論との対照において解読する、という作業を試みてきた。

そこには、「運動」をめぐる現われる社会との軋轢の新しいかたちが示されていた。運動論にとっての新しい問題と課題とが、投げかけられていた。そう受け取るべきではないだろうか。

運動をめぐる現在のもっとも深い問題は、或る危機に瀕しているという直感と危機感はあるながらも、あらわれ出たものとしては、もうこんなにも違ってしまふ、ということであった。「波うつ土地」の現前とその光景の目撃とは、この現在の強いる疑いなき前提である。にもかかわらず、富岡作品が「野菜の会」をあのようなかたちでしか理解できなかったように、通底しているはずの両者のあいだには、もう深い溝が走ってしまっている。この乖離が、運動をめぐる社会学的考察を奇妙に平板なものにしてきたように思われる。つ

まり両者をまったく独立無縁のものともみなすか、或いは（同じことだが）どちらか一方が他方へと収斂し統合されてゆくべきものとして、そういうかたちで論じられ、「問題」が設定されてきてしまったのである。

しかし、運動する人々も、富岡作品に現われる人々も、ともに自分の現在の感触を手放すことなく、同じ風景を前にして並びあっているのではないか。そのどちらも、確かに自分達の問題を見つめていて、ともに現在へと深く関わっているのではないか。

だから、その立場のどちらか（だけ）が正しく、どちらかは他方へと統合・揚棄されるべきだ、というかたちで問題を設定することは無意味に思われる。同じ現在の風景を、ともに自分の感覚や感触をごまかすことなく、並びあって見つめている。その両者の乖離や距離が「問題」なのではなくて、両者が並びあって、しかし違う角度から、ともに現在を見つめている、そういう理解を持つことがまず必要なのである。

注

- (1) 藤原新也もまた、富岡多恵子ときわめて近い原体験と、現在への感覚を共有している、と見られる。藤原〔1983 a〕参照。
- (2) ハーバーマスはこう言っている。「この十年ないし二十年のあいだに、西洋の高度に発展した社会では（中略）富の分配のひき起こす制度化された抗争とは多くの点で異なる抗争が出現している。これらの抗争が燃え上がる場所は、もはや物質的再生産の分野ではない。（中略）こうした新しい抗争はむしろ文化的再生産、社会的統合、そして社会化にともなう領域に起きているのであり、抗争の推移も副次的制度的な、いずれにせよ議会外的な抵抗の形式をとっている。（中略）こうした抗争はさまざまな欠陥を原因としているが（中

略）対話的構造を持つはずの諸行為領域の物象化（中略）という事態である。求められているのは（中略）危険に曝された生活様式を防衛し、再建することである。」（Habermas〔1981〕）。ハーバーマスのような説明が、あるところまで富岡に近づきながら、しかし決定的に或る地点から離れていってしまうのは、彼においては「生活世界」を浸食するものが外部から、つまりは「物象化」や「経済—行政複合体」としてやってくるものと認識されているのにたいして、富岡においてそれは自己の外部から、自分に無関係にやってくるものではなくてむしろ内部からやってくることによる。ハーバーマスにおいては「政治」や「経済」として外部からやってくるものが、富岡においては自分たちのどうしようもない欲望、どうしようもない生活の必要のようなものが迂回して自分たちを襲ってくるものとして直感されている。その微妙な差異が、ハーバーマスにおいては「新しい政治」への希望のような形へと結晶し、富岡においては或る絶望のような諦念のようなひんやりとしたものに凝固してしまう。富岡においては「問題」の根が見えることは、けっしてその「問題」解決への回路が見えてくることをいみしない。

- (3) 加藤典洋もまた、敗戦によって「国破れて」も残り、「天皇」が剥落しても何の異変も起こさなかった「山河」が、高度成長による日本人の集団変質によって決定的に破れていった理由を「高度成長は日本人のほとんどを『向上心』にかりたて、戦後の旧弊な生活態度、生活様式から脱出させ、さらに自然との『恥ずかしい』共存から離陸せしめた」、それはまさしく「自然の破壊が、このたびはぼく達の必要から、ぼく達の手でなされ、しかもそのことをぼく達は、知らないわけではない」（加藤〔1985〕）ととらえている。富岡作品の主人公は、勿論そのことを明瞭に見据えている。
- (4) エコロジカル・フェミニズムをめぐる議論の対立

と分岐もまた同様に、その分岐する場所を異にして対立しているように見える。エコ・フェミ批判者にとって「自然」を信頼してしまうこと、それは直視や認識を曇らす悪しき「信仰」のようなものと見える。逆にエコ・フェミ者にとって「自然」は、問題の所在を端的に示し、行動の指針を与え、生きるうえでの能動的な根拠を与えてくれるものなのである。それはちょうど富岡と「野菜の会」のような位置関係にあって、遠くからみるとぶつかっているように見えるが、じつは平行に擦れ違っている。

- (5) 西独でも「緑の党」の出現以来、環境保護か開発・経済成長か、といった二律背反的な問題構成が社会に軋轢を引き起こしたが、やがて社会民主党や、ついにはキリスト教民主同盟にまでも、「生活環境の保護」という主張は、転写されてきている。無論、強調点の違いは残っているのだが。仲井〔1986〕参照。
- (6) この時代＝社会的な刻印の内実がいったいどんなものであるのか、の探究は、社会運動論にとって、もっとも緊要な課題のひとつであると思われるが、

文献

- 安立清史 1985 「後期資本主義下の社会運動」、『ソシオロギス』9:164-177.
- 1986 「都市における反原発市民運動の生成と展開」、『ソシオロギス』10:1-23.
- 安立清史・高橋徹編 1985 「社会運動論関連年表」、『思想』737:付29-39.
- Cohen, J. L. 1985 “Strategy or Identity: New Theoretical Paradigms and Contemporary Social Movements”, *SOCIAL RESEARCH* 52-4: 663-716.
- Eder, K. 1985 “The ‘New Social Movements’: Moral Crusades, Political Pressure Groups, or Social Movements?”, *SOCIAL RESEARCH* 52-4: 869-900.
- 江原由美子 1985 『女性解放という思想』, 勁草書房。
- Freeman, J. 1975 *The Politics of Women's Liberation*. = 1978 奥田・鈴木訳『女性解放の政治学』, 未来社。
- 藤原新也 1981 『全東洋街道』, 集英社。
- 1983 a 『東京漂流』, 情報センター出版局。
- 1983 b 『メメント・モリ』, 情報センター出版局。
- 1986 『乳の海』, 情報センター出版局。
- Habermas, J. 1981 “New Social Movement”, *TELOS* 49.

残念ながら社会学的な分析がまだ十分及んでいない領域である。さしあたり、藤原〔1983 a〕が、富岡作品と同じ場所に立って、しかもそこに立つ自分や社会を自ら切開しようと試みている注目される作品である。

- (7) 或る運動者は、こうした閉塞した状況をさして「金太郎飴」現象と呼んでいた。
- (8) もちろん、トゥレーヌのいうように、運動の現代的な主体(I)や敵手(O)、係争目標や歴史性(T)を分析して、確定してゆくことも運動論の現代的な課題であるだろう。またそうした理論性を抽出するまえに、まず具体的なデータに当たって、運動を構造的に支配する資源の流れを実証的かつ丹念にあらいだす、という「資源動員論」の立場の作業の必要性も認めておかねばならない。しかし、ここで提起している「問題」は、そうした運動内在的な課題とは少しく角度を異にして、従来、運動論ではあまり扱われてこなかった領域に属する。

- 花崎 泉平 1985 『地域をひらく — 生きる場の構築』, 農山漁村文化協会。
- 橋爪大三郎 1985 『言語ゲームと社会理論』, 勁草書房。
 ————— 1986 『仏教の言説戦略』, 勁草書房。
- 磯田 光一 1986 『左翼がサヨクになるとき — ある時代の精神史』, 集英社。
- 柄谷 行人 1979 『意味という病』, 河出書房新社。
- 加藤 典洋 1983 「自閉と鎖国 — 1982 年の風の歌」, 『文藝』2。
 ————— 1985 『アメリカの影』, 河出書房新社。
 ————— 1986 「リンボーダンスからの眺め」, 『中央公論』6: 84-95。
 ————— 1987 「『世界の終り』にて」, 『世界』2: 265-294。
- Lalonde, B., Moscovici, S., Dumont, R. 1978 *Pourquoi les écologistes font-ils de la politique?* = 1982 辻由美訳『エコロジストの実験と夢』, みすず書房。
- 丸山 真男 1964 『増補版 現代政治の思想と行動』, 未来社。
- Melucci, A. 1985 “The Symbolic Challenge of Contemporary Movements”, *SOCIAL RESEARCH* 52-4: 789-816。
- 見田宗介・小阪修平 1986 『現代社会批判 — 〈市民社会〉の彼方へ』, 作品社。
- 村上 春樹 1982 『羊をめぐる冒険』, 講談社。
 ————— 1985 『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』, 中央公論社。
- 村上 泰亮 1975 『産業社会の病理』, 中央公論社。
 ————— 1984 『新中間大衆の時代』, 中央公論社。
- 仲井 斌 1986 『緑の党』, 岩波書店。
- 落合恵美子 1985 「フェミニズムの諸潮流」, 『ジュリスト増刊総合特集 — 女性の現在と未来』39: 238-244。
- Offe, C. 1985 “New Social Movements: Challenging the Boundaries of Institutional Politics”, *SOCIAL RESEARCH* 52-4: 817-868。
- Olson, M. 1965 *The Logic of Collective Action: Public Goods and the Theory of Groups* = 1983 依田・森脇訳『集合行為論 — 公共財と集団理論』, ミネルヴァ書房。
- 芹沢 俊介 1985 『「イエスの方舟」論』, 春秋社。
- 芹沢俊介・吉本隆明 1985 『対幻想 — n個の性をめぐって』, 春秋社。
- Spretnak, C., Capra, F. 1984 *Green Politics*, = 1986 吉富他訳『グリーン・ポリテックス』, 青土社。
- 高木 仁三郎 1982 『わが内なるエコロジー』, 農山漁村文化協会。
 ————— 1985 『いま自然をどうみるか』, 白水社。
- 竹田 青嗣 1986 『陽水の快樂』, 河出書房新社。
- Tilly, C. 1978 *From Mobilization to Revolution* = 1984 堀江湛監訳『政治変動論』芦書房。
 ————— 1985 “Models and Realities of Popular Collective Action”, *SOCIAL RESEARCH* 52-4: 749-787。

- 宇 沢 弘 文 1974 『自動車の社会的費用』, 岩波書店。
山 尾 三 省 1981 『聖老人』, プラサード書店。
——— 1984 『ジョーがくれた石』, 地湧社。
山 崎 正 和 1984 『柔らかい個人主義の誕生』, 中央公論社。
——— 1986 『柔らかい自我の文学』, 新潮社。
吉 岡 齊 1982 『テクノトピアをこえて — 科学技術立国批判』, 社会評論社。

(あだち きよし)